

Title	巻頭言 「共生社会」の射程
Author(s)	稲田, 敦子
Citation	聖学院大学総合研究所 Newsletter, Vol.20-2 : 1
URL	http://serve.seigakuin-univ.ac.jp/reps/modules/xoonips/detail.php?item_id=2423
Rights	

聖学院学術情報発信システム : SERVE

SEigakuin Repository for academic archiVE

「共生社会」の射程

近年「共生」という語が含意するものは多義的となり、適用範囲が大幅に広がっているが、元来は生物種間に適用され相互に影響しあう二種の生物の個体群間に生じる関係の一つとされてきた。その経緯と意味は『共生の意味論』（藤田紘一郎）で示されるように、第一に、異種の個体が「一所に棲む」ことによる生物間の接近度であり、第二は、一方の種の個体の存在が他方の種の個体にとって「利益をおよぼす」のか否かという個体間の質に関するものである。こうしたあり方を背景にして、「共生」という語は、人間・モノ・自然をめぐる膨大かつ多面的な関係性に適用され、多文化および各社会の内外ともにある差異の壁への対抗概念として提起されてきたのである。

人間と自然との関係性を本当の意味で問うということは、自然のとらえなおしと同時に、自己自身への問い直しを行うことを意味する。人間の物理的自然の支配は止まるところのないかのごとくだが、人間的な自然の克服、人間が自分自身を支配するということがどうだろうか。このような根源的な問いかけをした人物の一人がイギリスのエドワード・カーペンター（1844～1929）である。彼の思想は、共生の問題を先駆的に提起しながらも、これまで近代思想史上であまり光の当てられていなかったいわば思想の地下水脈の一路といえるであろう。

カーペンターの問題意識は、社会総体とそこでの自己を、自然を射程に組み込むことにより、解決の糸口を探ろうとするものである。言い換えれば、「人間的な自然」の全体性の回復を、「本来的自然」と「社会的自然」との調和状態において成立させる方策をミルソープでの実践を通して求めようとした。彼の著である Towards Democracy の主題は、人間存在の精神的基礎としての「共同の生」とともに「個人の人格の普通の原型を超える領域」が組み込まれることが示されていた。彼は、自然との直接生産活動による生活を基盤とした地域ネットワークをたちあげるとともに、外的環境の合理化が進行し社会における人間関係が揺らぐ状況のなかで、普遍的価値と関わる主体形成および社会倫理の問題を探求していったあり方はあらたな地下水脈に連なるものとなった。

カーペンターは、「制度と慣習の巨大な多様性」を確認し、国家の介入、官僚制の強化を排除して、それらの「負」の側面を見据えつつ、新しい理想を探究しながら古いものの外皮を漸次脱ぎ捨てていくことにより、公共の良心の覚醒のプロセスを思い描いていったのである。このプロセスを進展させる内的な生の創造力を、彼は、「共同の生」として、その意識の覚醒と成長を自然との相互媒介性を進める中で促進していこうとしたのであり、現代における普遍的課題を射程に入れているといえよう。

聖学院大学人文学部長 稲田 敦子
